

テーマ1 簿記の基礎

重要度 ★★★

経済社会で行われている「財務諸表の作成」、「財務諸表の監査」および「税金の計算」といった会計や税務に関する仕事には、簿記という経済活動に関する記録ルールが必要不可欠なものとなっています。したがって、みなさんが会計や税務の仕事を行う上でも、また、そのための勉強を行う上でも、簿記をきちんと理解することはとても重要な第一歩となるわけです。テーマ1では、この簿記の基礎となる事項について勉強します。



このテーマの学習内容

テーマ番号	学 習 内 容	学習回数
1-1	簿記の予備知識	入門Ⅰ第1回
1-2	財産	入門Ⅰ第1回
1-3	貸借対照表	入門Ⅰ第1回
1-4	損益	入門Ⅰ第1回
1-5	損益計算書	入門Ⅰ第1回

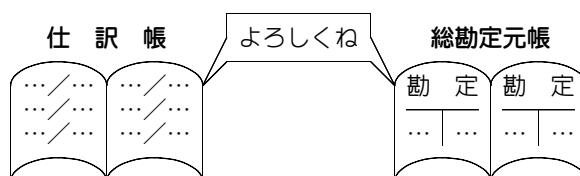
1-1 簿記の予備知識

1 簿記の語源

簿記という用語は、帳簿記録が略されたものであるとか、英単語のBookKeepingの発音と意味とを巧みに生かして編み出された造語であるといわれています。

2 簿記の意義

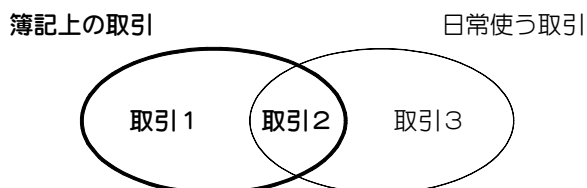
簿記とは、企業が行った取引を一定のルールに従って、帳簿に記録することをいいます。なお、ここでいう帳簿には、仕訳帳（しわけちょう）と総勘定元帳（そうかんじょうもとちょう）の2つがあります。



3 取引

簿記では、財産に増減変化をもたらす事項を取引といいます。

- 〈取引1〉火事で建物が焼失した。
- 〈取引2〉銀行から現金を借り入れた。
- 〈取引3〉建物を借りる契約を結んだ。



- 〈取引1〉建物という財産が減少しているので、簿記上の取引となります。
- 〈取引2〉現金という財産が増加しているので、簿記上の取引となります。
- 〈取引3〉契約を結んだだけで、財産に増減変化がありませんので、簿記上の取引ではありません。

つまり、〈取引1〉と〈取引2〉が簿記上の取引となるわけです。

4 簿記の目的

簿記には、次の2つの目的があります。

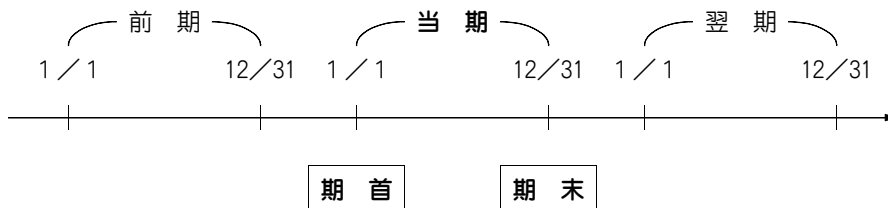
- (1) 一定時点においてどれだけの財産があるか、つまり**財産の状態を明らかにすること**。
- (2) 一定期間の営業活動の結果どれだけもうかったか、つまり**経営成績を明らかにすること**。

5 簿記の前提

- (1) 簿記は1つの独立した企業を単位として行います。簿記入門Ⅰでは、商品売買業を営む**個人企業が前提**となっています。なお、簿記入門Ⅱでは、株式会社を前提とした学習も行うこととなります。
- (2) 取引はすべて**貨幣の価値**で記録します。
- (3) **会計を行う期間**を設定します。

6 会計期間

簿記では、企業の営業活動を一定の期間（通常1年間）に区切って、各期間ごとに記録・計算を行っていきます。この一定期間のことを**会計期間（又は、事業年度）**といいます。そして、会計期間の初めを期首、終わりを期末（決算日）、現に記録・計算を行っている会計期間を当期、当期からみて前の会計期間を前期、次の会計期間を翌期（次期）といいます。



➡トレーニング 問題1-1



歴史 複式簿記の起源

複式簿記は、13世紀初頭にフィレンツェ、ジェノア、ヴェネチアなどのイタリア商業諸都市で萌芽（ぼうが）をみたといわれています。そして、14～15世紀には既に形を整え、15世紀の末には完成の域にまで達していたようです。

この複式簿記を解説した活版印刷物の中で、現存する最古のものは、1494年に数学者ルカ・パチオリによって執筆、出版された「算術・幾何・比及び比例のすべて」という書物です。この書物はその名が示すとおり数学書であって簿記書ではないのですが、その「計算及び記録」の章で、当時イタリアの銀行家が用いていた帳簿記録の方法として、複式簿記が紹介されています。

1-2 財産

1 財産

財産とは、資産、負債及び純資産（資本）の総称をいいます。

(1) 資産

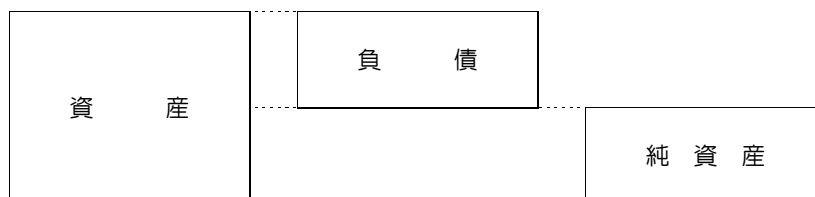
資産とは、企業が所有する物や権利（債権）、つまりプラスの財産のことをいいます。例えば、現金、商品、建物、土地、貸付金などがこれにあたります。

(2) 負債

負債とは、将来返済しなければならない義務（債務）、つまりマイナスの財産のことをいいます。例えば、借入金がこれにあたります。

(3) 純資産（資本）

純資産とは、資産と負債の差額、つまり正味の財産のことをいいます。資産から負債を差し引くと純資産が算定されます。



2 財産の変動

資産及び負債は、取引が生ずることにより増減変化がもたらされます。また、同時に、資産から負債を差し引いて算定される純資産が増減する場合があります。



設 例 財産

下記の資産と負債に基づいて、純資産の金額を算定しなさい。

現 金 650円 商 品 700円 土 地 450円 借入金 800円



解 説 (単位：円)

(1) 資産と負債の金額

① 資産：現金650＋商品700＋土地450＝1,800

② 負債：借入金800

(2) 純資産の金額

資産1,800－負債800＝純資産1,000

(3) 資産・負債および純資産の関係

資 産		負 債		純 資 産
現 金	650	借入金	800	1,000
商 品	700			
土 地	450			
	1,800			

➡ トレーニング 問題1－2～問題1－4



設 例 財産の変動

商品売買業を営む個人企業Ｔ店に関する下記の【資料】に基づいて、各時点における純資産の金額を算定しなさい。

【資料１】期首における資産と負債

現金 650円 商品 700円 土地 450円 借入金 800円

【資料２】当期における取引

- (1) 借入金200円を現金で返済した。
 - (2) 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
 - (3) 従業員の給料140円を現金で支払った。
-



解説 (単位: 円)

	資 産	負 債	純 資 産																										
◇ 期 首	<table><tr><td>現 金</td><td>650</td></tr><tr><td>商 品</td><td>700</td></tr><tr><td>土 地</td><td>450</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,800</td></tr></table>	現 金	650	商 品	700	土 地	450				1,800	<table><tr><td>借入金</td><td>800</td></tr></table>	借入金	800	<table><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,000</td></tr></table>				1,000										
現 金	650																												
商 品	700																												
土 地	450																												
	1,800																												
借入金	800																												
	1,000																												
(1) 借入金返済	<table><tr><td>現 金</td><td>650</td></tr><tr><td></td><td>△200</td></tr><tr><td>商 品</td><td>700</td></tr><tr><td>土 地</td><td>450</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,600</td></tr></table>	現 金	650		△200	商 品	700	土 地	450				1,600	<table><tr><td>借入金</td><td>800</td></tr><tr><td></td><td>△200</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>600</td></tr></table>	借入金	800		△200				600	<table><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,000</td></tr></table> 純資産の増減なし				1,000		
現 金	650																												
	△200																												
商 品	700																												
土 地	450																												
	1,600																												
借入金	800																												
	△200																												
	600																												
	1,000																												
(2) 商品売上	<table><tr><td>現 金</td><td>450</td></tr><tr><td></td><td>+900</td></tr><tr><td>商 品</td><td>700</td></tr><tr><td></td><td>△600</td></tr><tr><td>土 地</td><td>450</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,900</td></tr></table>	現 金	450		+900	商 品	700		△600	土 地	450				1,900	<table><tr><td>借入金</td><td>600</td></tr></table>	借入金	600	<table><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,000</td></tr><tr><td></td><td>+ 300</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,300</td></tr></table> 純資産が増加				1,000		+ 300				1,300
現 金	450																												
	+900																												
商 品	700																												
	△600																												
土 地	450																												
	1,900																												
借入金	600																												
	1,000																												
	+ 300																												
	1,300																												
(3) 給料支払	<table><tr><td>現 金</td><td>1,350</td></tr><tr><td></td><td>△140</td></tr><tr><td>商 品</td><td>100</td></tr><tr><td>土 地</td><td>450</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,760</td></tr></table>	現 金	1,350		△140	商 品	100	土 地	450				1,760	<table><tr><td>借入金</td><td>600</td></tr></table>	借入金	600	<table><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,300</td></tr><tr><td></td><td>△ 140</td></tr><tr><td></td><td> </td></tr><tr><td></td><td>1,160</td></tr></table> 純資産が減少				1,300		△ 140				1,160		
現 金	1,350																												
	△140																												
商 品	100																												
土 地	450																												
	1,760																												
借入金	600																												
	1,300																												
	△ 140																												
	1,160																												

1 - 3 貸借対照表

1 貸借対照表

貸借対照表（たいしゃくたいしょうひょう）とは、一定時点における財産を一覧表にしたものをいいます。

貸借対照表では、資産を左側に、負債と純資産とを右側に具体的な名称を付して記載します。なお、純資産については資本金と記載します。

2 借方・貸方

簿記では左側のことを借方（かりかた）、右側のことを貸方（かしかた）といいます。貸借対照表においては、借方に記載される項目が資産、貸方に記載される項目が負債と純資産ということになります。

なお、貸借対照表の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

貸 借 対 照 表	
× × 年 × 月 × 日	
（ 借	資 産 × × ×
	負 債 × × ×
	純 資 産 × × ×
方 ）	合 計 × × ×
	合 計 × × ×
	（ 貸 方 ）

3 当期純利益

一定期間における営業活動により純資産が増加した場合、それは利益（もうけ）があったということになります。そこで、期末の貸借対照表ではこの内容を明示するために、**純資産が増加した部分を当期純利益と記載**します。なお、当期純利益を記載する関係で**資本金には期首の資本の金額を記載**します。



参 考 略号

貸借対照表は、英語でバランス・シート（Balance Sheet）と呼ばれており、これを略して B / S と表記することがあります。

設 例

商品売買業を営む個人企業T店の期首（×2年1月1日）と期末（×2年12月31日）における財産に基づいて、各時点における貸借対照表を作成しなさい。

【資料1】期首における財産

現金 650円 商品700円 土地450円 借入金800円 資本金1,000円

【資料2】期末における財産

現金1,210円 商品100円 土地450円 借入金600円 資本金1,160円

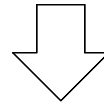
解 説（単位：円）

1 期首の貸借対照表

貸 借 対 照 表					
× 2 年 1 月 1 日					
現	金	650	借	入	金 800
商	品	700	資 本 金 1,000		
土	地	450			
合	計	1,800	合	計	1,800

2 期末の貸借対照表

貸 借 対 照 表					
× 2 年 12 月 31 日					
現	金	1,210	借	入	金 600
商	品	100	資 本 金 1,160		
土	地	450			
合	計	1,760	合	計	1,760



この方がもうけた金額
がわかりやすいでしょ

貸 借 対 照 表					
× 2 年 12 月 31 日					
現	金	1,210	借	入	金 600
商	品	100	資 本 金 1,000		
土	地	450			
			当期純利益 160		
合	計	1,760	合	計	1,760

トレーニング 問題1-7～問題1-8

1-4 損益

1 損益

前設例における期末の貸借対照表からは、当期に純資産が160円増加したことが読み取れます。しかし、これが当期のどのような原因によって生じたものなのかということまでは読み取ることができません。そこで、この原因を示すために、損益という概念が必要となります。

損益とは、純資産の変動原因であり、次に示す収益と費用の総称をいいます。

(1) 収益

収益とは、**純資産を増加させる原因**のことをいいます。いいかえれば、当期において企業がもった原因が収益です。例えば、商品販売益、受取家賃、受取利息、受取手数料、固定資産売却益などがこれにあたります。

(2) 費用

費用とは、**純資産を減少させる原因**のことをいいます。いいかえれば、当期において企業が損をした原因が費用です。例えば、給料、支払利息、支払家賃などがこれにあたります。

2 当期純利益の算定

当期の収益の総額（当期においてもった総額）から費用の総額（当期において損した総額）を差し引くと、当期純利益（純資産の当期純増加額）が算定されます。



歴史 借方・貸方の意味

借方と貸方という用語は、12～13世紀頃のフィレンツェの振替銀行に由来します。銀行では、貸出先（融資先）と借入先（預金先）を勘定によって管理していましたが、その時に借方と貸方という用語を使用したのです。

ただし、欧米では日本とは違い、あくまでも先方を主語として表現する慣習があるため、貸出先のことを（銀行からお金を借りている人という意味で）借方、借入先のことを（銀行にお金を貸している、すなわち預金している人という意味で）貸方と表現しました。

なお、勘定の左側を借方、右側を貸方としたのは、欧米では左から右に横書をする文化だからとか、債務よりは債権を第一義的に考える傾向にあるからなどと言われています。

<メ モ>



設 例

商品売買業を営む個人企業 T 店に関する下記の【資料】に基づいて、どのような収益と費用があるかを示しなさい。また、それらの金額に基づいて当期純利益を算定しなさい。

【資料 1】期首における資産と負債

現金 650円 商品 700円 土地 450円 借入金 800円

【資料 2】当期における取引

- (1) 借入金200円を現金で返済した。
- (2) 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料140円を現金で支払った。



解 説 (単位：円)

1 収益と費用

		資	産			負	債			純	資	産	
◇ 期	首												
		現 金	650			借入金		800					
		商 品	700										
		土 地	450										
			1,800								1,000		

(1) 借入金返済	現金	650	借入金	800	
		△200			
	商品	700		600	
	土地	450			
		1,600			1,000

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(2) 商品売上

現金	450		借入金	600	
	+900				
商品	700				
	△600				
土地	450				
	1,900				
					1,000
					+ 300
					1,300

純資産が300増加しています。これは、商品の売上によって300もうかったことを意味します。つまり、この取引によって**商品販売益**という収益が**300発生**したことになります。

(3) 給料支払

現金	1,350		借入金	600	
	△140				
商品	100				
土地	450				
	1,760				
					1,300
					△ 140
					1,160

純資産が140減少しています。これは給料の支払いによって40損したことを意味します。つまり、この取引によって**給料**という費用が**140発生**したことになります。

2 当期純利益の算定

商品販売益300－給料140＝当期純利益160

1-5 損益計算書

1 損益計算書

損益計算書（そんえきけいさんしよ）とは、一定期間における損益を一覧表にしたものをいいます。

損益計算書では、費用を借方に、収益を貸方に具体的な名称を付して記載します。そして、両者の差額を借方に当期純利益と記載します。なお、収益を貸方に記載するのは、資本の増加原因として資本金と同じ方向にするためであり、費用を借方に表示するのは、資本の減少原因として資本金と反対の方向にするためです。

なお、損益計算書の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

損 益 計 算 書			
×年×月×日～×年×月×日			
(借方)	費 用×××	収 益×××	(貸方)
	当期純利益×××		
	合 計×××	合 計×××	

2 損益計算書の役割

損益計算書の役割は、貸借対照表における当期純利益がどのような原因によって発生したのかを明らかにすることにあります。つまり、損益計算書は、当期純利益の内訳明細を示す一覧表なのです。

参 考 略号

損益計算書は、英語でプロフィット・アンド・ロス・ステイトメント（Profit and Loss Statement）と呼ばれており、これを略してP/Lと表記することがあります。

歴 史 複式簿記に関する名言集

- 「人類が生んだ最も素晴らしい発明の一つ」 …… 文豪ゲーテ
- 「比例理論のように絶対完全なもの」 …… 数学者ケイリー
- 「近代資本主義の発展にとって不可欠な用具」 …… 経済学者ゾンバルト

**設 例** 損益計算書

商品売買業を営む個人企業Ｔ店の当期（×２年１月１日～×２年12月31日）に関する下記の収益と費用に基づいて、損益計算書を作成しなさい。

商品販売益 300円 給 料 140円

**解 説**（単位：円）損 益 計 算 書

×２年１月１日～×２年12月31日

給 料 140	商品販売益 300
当期純利益 160	
合 計 300	合 計 300



設 例 損益計算書の役割

商品売買業を営む個人企業 T 店に関する下記の【資料】に基づいて、当期（× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日）の期末における貸借対照表と損益計算書を作成しなさい。

【資料 1】期首における財産

現 金 650 円 商 品 700 円 土 地 450 円 借入金 800 円 資本金 1,000 円

【資料 2】当期における取引

- (1) 借入金 200 円を現金で返済した。
- (2) 商品 600 円を 900 円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料 140 円を現金で支払った。

【資料 3】期末における財産

現 金 1,210 円 商 品 100 円 土 地 450 円 借入金 600 円 資本金 1,160 円



解 説 (単位：円)

貸 借 対 照 表

× 2 年 12 月 31 日

現 金 1,210	借 入 金 600
商 品 100	資 本 金 1,000
土 地 450	当期純利益 160
合 計 1,760	合 計 1,760

損 益 計 算 書

× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日

給 料 140	商品販売益 300
当期純利益 160	
合 計 300	合 計 300

もうけの内訳を示す
のが、ボクの役割！

<メ モ>



いまさら聞けない!! 簿記論で使う算数～分数

(1) 分数の加算・減算（たしざん・ひきざん）

① 分母が同じ分数同士であれば、分子同士を加算・減算する。

$$\begin{array}{l} \text{(例)} \quad \frac{3}{5} + \frac{1}{5} = \frac{3+1}{5} \\ \qquad \qquad \qquad = \frac{4}{5} \end{array} \quad \left| \quad \begin{array}{l} \text{(例)} \quad \frac{3}{5} - \frac{1}{5} = \frac{3-1}{5} \\ \qquad \qquad \qquad = \frac{2}{5} \end{array} \right.$$

② 分母が違う分数同士であれば、分母をそろえてしてから分子同士を加算・減算する。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} + \frac{1}{3} &= \frac{1 \times 3^*}{2 \times 3^*} + \frac{1 \times 2^*}{3 \times 2^*} \quad \Leftarrow \text{分母を6にそろえる（通分）} \\ &= \frac{3}{6} + \frac{2}{6} \\ &= \frac{5}{6} \end{aligned}$$

※ 分数の分母と分子に同じ数を数をかけても、もとの分数の大きさは変わらない。

(2) 分数の乗算（かけざん）

分数同士の乗算は、分母は分母同士、分子は分子同士乗ずる（掛け合わせる）。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} \times \frac{3}{5} &= \frac{1 \times 3}{2 \times 5} \\ &= \frac{3}{10} \end{aligned}$$

(3) 分数の除算（わりざん）

除算の場合、割る数の逆数（分子と分母を入れ替えた分数）を乗ずる。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} \div \frac{3}{5} &= \frac{1}{2} \times \frac{5}{3} \\ &= \frac{5}{6} \\ \frac{1}{2} \div 3 &= \frac{1}{2} \div \frac{3}{1} \\ &= \frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \\ &= \frac{1}{6} \end{aligned}$$